

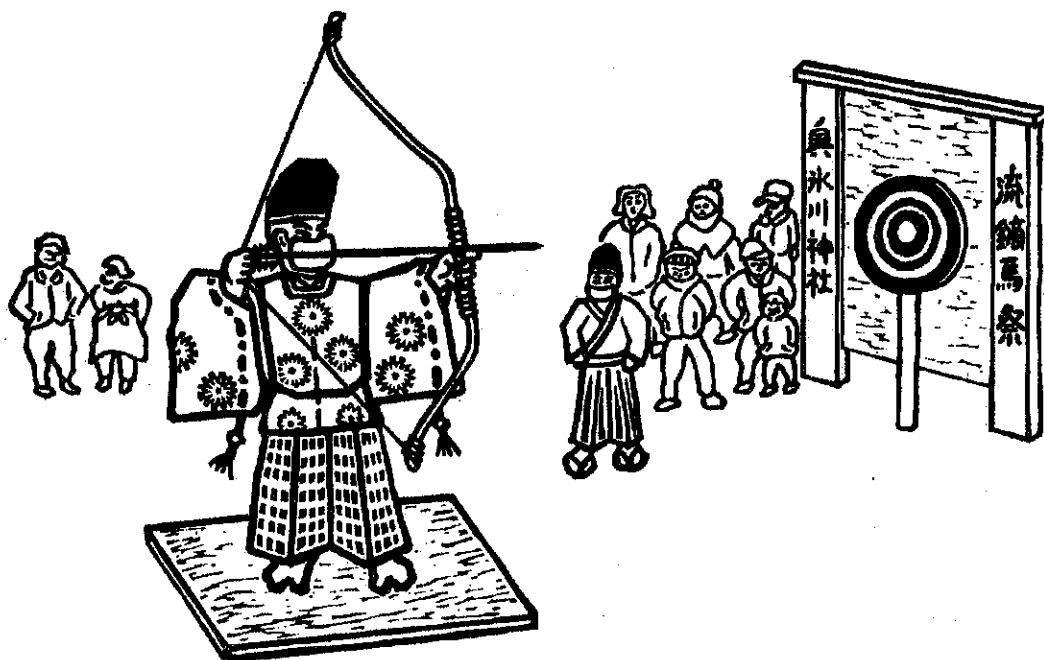
奥多摩のこころ



奥多摩

《第28号》

平成25年1月15日
奥多摩観光協会



木版画 安藤修二

～ 季節 だより ～

流鏝馬 (やぶさめ)

奥多摩町では、正月神事である「流鏝馬」が3箇所
の神社で行われています。

1月5日(土)に日原小菅「伽藍神社」、1月6日(日)
に川井地区「神明神社」、1月27日(日)に氷川地区
「奥氷川神社」の順で行われます。

奥多摩観光ガイドの清水隆芳さんから、地元であ
る川井地区「神明神社」の流鏝馬についてお聞きし
ました。

江戸時代から続く伝統行事で、現在のところは氏
子住民19軒により行われています。原則として、正
月三ヶ日を除く最初の土曜日に行われます(ただし、
本年は6日(日))。

前年のうちに社殿と境内の掃除、お供え物、榊を
用意します。当日、弓矢を準備します。弓は竹で親指
くらいの太さを2本、矢は篠で2本、弦は麻ひも、的
はわっぱに半紙を張り焼炭で書くなど手作りして用

意します。

そして当日、1年の平安無事を祈り、玉串を宮司、
隣組長、長老から捧げます。厳かな神事が行われた
あと1人2回ずつ4回射ます。終了後は、以前は持
回りで2軒1組で氏子宅において新年会を行ってい
ました。接待が大変だったようです。今では、仕出し
を注文して近くの蟠龍院にて行うようになっていま
す。その際、一年の諸々の役員決め等をします。

以上、清水隆芳さん方の家に伺いお話を聞かせ
て頂きました。庭先には柿、サツマイモなどが干し
てあり、裏手は山、社と杉木立があり、目の前には多
摩川をはじめ山里の風景が広がっていました。こん
な中で昔ながらの行事が延々と受け継がれてきた
んだなあと思いました。奥多摩は、東京都内であり
ながら山々に囲まれ、まだまだ伝統文化がたくさん
息づいています。

(語り手:清水隆芳、書き手:武田和代)

～ 森 さ ゝ せ え ～

山里歩きシリーズ①

開催日:平成25年2月21日(木)

今回歩く山里は、「境」、「中山」、「原」の3地域で、位置的には、「むかしみち」(旧青梅街道)で繋がっています。

「境」は、琴浦橋から始まり白髭神社西の道祖神の先まで。北は三ノ木戸、南は御前山までと南北に長く広い地域です。

「中山」は、東側を「境」と接しており、道祖神辺りから水根、むかしみちの終点・「水と緑のふれあい館」の手前まで、北は六ツ石山、水根山(鷹ノ巣山の手前)まで、南は惣岳山、西は倉戸山までと、3集落の中では一番広い地域です。

「原」は、奥多摩湖を真ん中に抱え、北東面を殆ど「中山」と接しており、惣岳山の山頂手前で僅かに「境」と接しています。北は倉戸山、西は峰谷橋、南は月夜見山、東は惣岳山という、これもまた広い地域です。

【境】:何と言っても「むかしみち」にある白髭の大岩(神社境内)と、毎年8月16日に行われる例祭の獅子舞です。「体験の森(奥多摩都民の

森)」で宿泊しての炭焼き体験等もよく、御前山の登山口としてもよい。

【中山】:以前は「境」に属していたそうです。「むかしみち」では、「いろは楓」は毎年素晴らしい紅葉を見せてくれます。しだくら橋からの眺めも一見に値します。また、二股大根を供えて一心に祈れば縁結びが成ると言われる「縁結びの地蔵尊」もあります。供えられた白い大根を見られた時には、なんだかワクワクします。その横に馬頭観音もあります。昔は、険しく細い山道のため、馬が谷底に度々落ちたことから、馬頭観音が多くあったそうです。

【原】:奥多摩湖を真ん中にしているだけあって、湖底から汲み上げる湯「鶴の湯温泉」が良い。江戸時代には名湯として知られ、多くの客で賑わっていたそうです。

奥多摩湖右岸遊歩道「奥多摩湖いこいの路」は、ダムサイトから「山のふるさと村」までの12kmで、認定森林セラピーロードになっております。

(西原潤治)

～ 行 って 来 た ゃ よ ～

山里歩きシリーズ①

一大丹波・川井地区一

従来のコースの逆回りにしたため、新しい発見もあった。川井駅より青梅街道に降りて大正橋の案内文に誤記があるのを見つけた。西に向かって5分程のところの橋の文字が濁らずに「はし」と刻んであるのを発見。右に道が登り詰めて行く。川井八雲神社の入口に大きなサルノコシカケを見つける。かなり大きくて、人の出入りの激しい処によく残ったものだ。

急な石段を登り、神楽殿をくぐって階段棧敷の広場に出る。ここは小丹波の熊野神社の神楽殿と同じ造りで、都の文化財に指定されている。

八雲神社から蟠龍院までは10分程。車の通行も少なく、のんびり歩ける。蟠龍院から竹の花へ下り、大丹波の集落へ登っていく。大丹波川国際ます釣

場のトイレを利用。

少し戻って釜飯屋の横を登り、薬師堂を見て、青木神社への道を進む。昼食休憩30分程で北上橋へ向かう。山里歩き絵図で北上橋にトイレの表示があるが、現在は撤去されている。上雲橋そばの分校跡地入口には、廃校時の子供たちの手形が残されている。

そこからしばらく歩くと輪光院に着く。ここは八代將軍吉宗の子供である田安家の領地であったが、宝暦11年に大幅な年貢増を申し付けられ、度々減免を願い出たが却下され、やむなく目安箱に箱訴をし、関係者が囚われの身となり10数名が牢死した。地元の関係者は4名のようなが。

近年まで供養碑には縄がかけられていたという。ここからます釣場へ戻り、トイレをすませて大丹波川左岸の道を川井駅に向かった。

(杉浦重明)

～ 奥多摩「山岳救助隊日誌」抄 その26 ～

「紅葉の川苔谷に転落」

いま奥多摩は紅葉に包まれている。紅葉は、葉の成分である葉緑素が分解するために起こるが、残暑が長く急な冷え込みが美しい紅葉が見られる条件のようだ。今年の奥多摩はその条件にぴったりのようで、いまでも美しい。

私の近所にお住まいのNHK気象解説者、中村次郎さんはラジオの〈気象歳時記〉などでもおなじみだが、以前出版された「日本列島四季ごよみ」という著書に、おもしろいデータを載せている。紅葉前線の南下の速度は、平地の場合で1日20*。山頂から麓に向かうときは100*下るのに、2.4日かかるという調査があるという。なんと解りやすい。つまりこれで行くと、標高2000*の雲取山稜線から、山麓の〈奥多摩むかし道〉の標高約500*辺りまで南下に要する日数は36日掛かる計算だ。

紅葉が美しく登山者に人気のある川苔山も今がちょうど見頃だ。11月4日午後3時ころ、110番通報が入った。「百尋ノ滝から100*ほど下で、女性が登山道を踏み外し川苔谷に転落した」というものであった。

奥多摩交番に在所していた吉田副隊長は山岳救助隊を招集した。私は奥多摩消防署にもその旨の連絡を入れ、取りあえず交番にいる副隊長以下4名が山岳救助車に乗り込み先発した。

私は後部座席の吉田副隊長に、通報者とケータイで連絡を取り、転落した場所を詳しく聞くようお願いした。右岸の登山道から川苔谷に転落したのであれば距離は10*ほどの転落ですむが、平成15年に起きた転落事故のように、百尋ノ滝から川苔山方向に10分ほど登った上部の登山道から転落したのであれば、150*の距離がある。あのときの転落した女性は同じく橋の下流の川苔谷で即死状態で発見されたからだ。しかし車は川苔谷林道に入りケータイは圏外で繋がらなかった。

林道を車で飛ばし細倉橋まで行くと、先発していた市川隊員が通報者と接触し、状況を聴取していた。車を止め「転落した地点は百尋ノ滝の上の登山道か？」と聞くと「そのようです」との答えが返ってきた。「これはヤバイ最悪だぞ」と思って、そのまま百尋ノ滝上まで林道を車で飛ばした。

百尋ノ滝上の林道に車を止め、ザイルやバスケット担架などの救助用具を持ち、4人で近道の小尾根を走るように下った。細倉橋からの登山道に出て百尋ノ滝手前の橋に向かうと、対岸で手を振っている数名

の登山者がいた。平成15年の転落事故とほぼ同じ場所である。現場に到着した。

転落した女性さん(44歳)は、川原の窪みにザックを背にし横たわっていた。両膝や手足の擦過痕が痛々しい。上の斜面の土砂が崩れ、転落痕がはっきりと見て取れた。この150*上の登山道から転落し、この川苔谷まで落ちたのだ。私はさんの耳元で「さん判りますか、救助隊ですよ」と言うと目は瞑っているが「はい」とか細い返事が返ってきた。「もうすぐ救急隊も来ます。ヘリで病院に運びますから、それまで頑張るんですよ」と言うと「はい」と返事が返ってくる。私は奇跡としか思えなかった。

平成15年、この場所から15*ほど上流に女性が転落死した際、私は検証のためザイルでこの斜面を降下している。恐ろしいほどの傾斜と高さである。そして途中で引っ掛かっていた遭難者のザックを回収し、4ピッチでこの川苔谷に降り立った。この絶望的斜面をさんは転落し、そして意識さえあるのだ。

何とか早く収容し、この奇跡のような幸運をものにしたい。さんは「背中が痛い」と言っていたと同行者は言う。頸椎損傷のおそれもあり、下手に動かすこともできない。

同行者は今日、会社の友人4人で鳩ノ巣から川苔山に登山し、山頂から百尋ノ滝に下りる途中、前から2番目を歩いていたさんが落葉で足を滑らし、左の斜面に滑り落ち見えなくなったのだという。同行者等は登山道をジグザグに走り下って、川苔谷左岸の川原に倒れているさんを発見した。意識はあるものの相当の重傷と判断し、1名を現場に残し他の2名は救助要請するため、ケータイの通じる細倉橋まで走り110番通報したものであった。

後発の佐藤隊員がネックカラーを持って来たので着装した。奥多摩消防署の救助隊と救急隊も到着した。消防庁のヘリも飛来している。さんは消防救急隊にスクープ担架に乗せられ応急処置を受けている。

奥多摩消防署の木村大隊長も到着し、ヘリと連絡を取り合っている。私は「木村大隊長、150*も転落し重傷だ。何とかここからピックアップするように頼んでくれませんか」とお願いした。「了解、言ってみる」と言う。消防庁ヘリは「上の林道まで徒手搬送するに、時間はどれくらい掛かる」と聞いてきている。夕暮れは近い、ヘリ利用のタイムリミットはあと1時間ほどだろう。「木村大隊長、上まで上げるには2時間は掛かると言っていて、重傷なのでぜひここから吊ってくれるようお

願いで下さい」と頼み込む。木村大隊長は粘り強くヘリと交渉し、「やってみる」とのヘリからの回答を得た。ちょうどこの場所は壁は迫っているが、上にポックリと空間がのぞめる。

ヘリは高度を下げながら何度か近付き、真上 50 ㍎にホバリングした。そして担架を背負った航空隊員がホイスト降下してきた。沢底からのヘリ救助は航空隊も相当の技術を要すると思われる。一旦ヘリは離脱したが、さんを乗せた下の担架の準備が整うと、再度進入してきてホバリングしピックアップ態勢に入った。

ホイストが下ろされた。風圧の中、さんの乗った担架が航空隊員とともに宙に浮き上昇していく。担架はヘリの中に消え、すごい風圧を残してヘリは下流に飛び去った。さんは八王子医療センターに搬送された。

私たちもさんのことは心配していた。10日ほど経って同行者がお礼に山岳救助隊を訪れた。さんは頭部や骨盤などに骨折はあったが、頸椎などに致命的な損傷は無く、そして驚異的な回復をみせ、またリベンジに百尋ノ滝に来たいと言っているという。全くの驚きだ。

11月20日、東京都レンジャーが、転落防止を喚起する看板を取り付けたいから、転落現場に案内してもらいたいと言ってきた。あの現場付近、つまり百尋ノ滝から川苔山に向かう約20分間ほどの距離の登山道では、私が来てから5件の転落事故があり、いずれも50㍎から150㍎転落し、2名が死亡し他は重傷を負っている。奥多摩においては最も危険な場所といえる。私も転落箇所から下の川苔谷まで検証の意味で下降してみようと思っていた。

日原の前田小隊長を誘い、都レンジャーの滝沢さんと林さんを案内し、ザイルなどを背負って転落現場まで登った。現場は百尋ノ滝に下る木の階段と川苔山に登る木の階段のある分岐から、川苔山方向に10分ほど登り上げた最初の鉄階段を過ぎたカーブの付近である。

私はハーネスを着けて下降の準備をした。前田小隊長に手伝ってもらい、50㍎ザイルを2本ダブルにして立木に掛けた。ザイルを下に投げる。エイト環をセットしザイルに身を託す。

最初は右下に滑り台のような土の急斜面が続くが、すぐ90度の垂直の岩壁になり10㍎ほど続く。本当にここを転落したものだろうか。半信半疑のまま、立木を縫いながら土の急斜面を下降し、50㍎でピッチを切る。ザイルを回収して新たに立木にセットして、さらに急斜面を20㍎ほど降りると傾斜は少し緩む、とは言ってもザイル無しでは降りられるような傾斜ではない。ふと下を見ると何かカラフルな物が落ちて

いた。拾ってみるとカリマー製のトレッキングハットである。顎ひもが切れていた。やはりさんはこのルートを落ちて行ったのだ。帽子を回収しさらに下降する。

下の川苔谷が見えてきた。50㍎降りてザイルを立木に掛け替える。下に向かって「おーい」と声を掛けてみた。すぐ「おーい」と対岸から前田小隊長の応答があった。3人はもう下に降りて来ていたのだ。

3ピッチ目を下降する。すぐ垂直の崖が5㍎ほど続き土の斜面になる。そこに青色のテルモスが引っ掛かっていた。テルモスを回収し川苔谷の左岸川原に降り立った。確かにここにさんは倒れていたのだ。さんの転落したコースを忠実に辿ったことになる。

私は下で待っていた3人に、この斜面のあらましを話した。「この150㍎を転落し、よく生きていたなあ」が正直な感想である。

私は1月号の〈岳人〉誌に「剣でも奥多摩でも100㍎も転落すれば人間はおそらく死亡する」と書いた。それを次の号で改めなければならぬとは…。人間そんなヤツなもんでもないんだなあと考えさせられた事故であった。

さんは「転落してから1度止まり、同行者の姿も見えたが、また転落した」と話しているという。きっと最初の滑り台のような斜面で止まりかけ、上の人たちが見えたのだろう。その後あの垂直の岩壁を落ちてからは止まる要素はないし、上も見えない。最初の映像がずっと瞬に焼き付いているものだろう。

このさんの奇跡のような生還、大事にしてゆっくり静養し、復帰したら無理せず長く山を楽しんでもらいたいと思う。

秋嶺に向けペット吹く青年よ

(青梅警察署囑託員 山岳指導員 金 邦夫)

◆ 私は平成25年3月で山岳救助隊を卒業いたします。連載もこれが最終回となりました。長い間ご愛読ありがとうございました。

編集委員会からのお知らせ

「奥多摩『山岳救助隊日誌』抄」は、本号で終了しますが、次号からは、「奥多摩四季」のタイトルでエッセイを寄稿していただけることになりました。ご期待ください。

なお、1月から2年間にわたり、「岳人」という雑誌で「すぐそこにある遭難事故」のタイトルで金さんの連載が始まるそうです。こちらもご期待ください。

奥多摩音語り

奥多摩の年中行事(3)

二日 仕事始め 丁場(帳場)始め、それぞれの持場、職場の仕事始めで、山仕事の仕事始めでは、川井は、山へ饌米(せんまい)を撒いて鳥に与えてから始めました。日原では、この日は、少しだけ仕事をし、恵比寿講(えべすこう)が過ぎるまで、仕事をしなかったといひます。畑の仕事は、鍬(くわ)始めで、近くの畑へ行って、まねごとに仕事をするだけで、この日は、小正月の門の棒(かどのぼう、おっかどぼう)と繭玉飾りや粟穂神穂(あーぼへーぼ)飾りの材料となるカツノキやツゲ、カエデの枝を伐りに山へ行く家もありました(小正月飾りの材料は、暮れの内用意する家もありました。)

大丹波では、野の口といって、共有地のカヤト(茅を育てる場所)から屋根葺き用、炭俵用の茅を刈り始める日でした。

三日 やぶさめ(びしゃ)まつり 氷川の奥氷川神社、川井の神明神社、大澤小菅の伽藍神社、(この三社は、近年、祭日を変更しています。)

奥氷川神社では、桃の木のまっすぐに伸びた一年枝で弓を作り、的を飛び越えないように、ゆるやかに射ったといひますが、近年は、本式の弓矢を使用しています。流鏝馬(やぶさめ)といひても、騎射ではなく、立って射るものです。奥氷川神社では、やぶさめが行われる前に、「おみごく(御酒御供、甘酒のもと)」を食べる祭事がありました。おみごくとは、甘酒のもろみになるもので、その醸造過程は、古式にのっとり行われました。白張装束の当番3名が、丑の刻に東はずれの井戸から清水を汲んで来て、その水で、かための粥を炊き、発酵させておいた麴とまぜて桶に詰め、密封してから炬燵に入れて加温して置き、神前へ供えた後、早朝、氏子たちが、小量ずつ白紙でいただいたといひます(現在、おみごくの神事は、行われていません。)

【資料】 奥多摩町誌、広報おくたま

(奥多摩郷土研究会会員 岡部義重)

奥多摩歳時記

奥多摩のジャガイモ

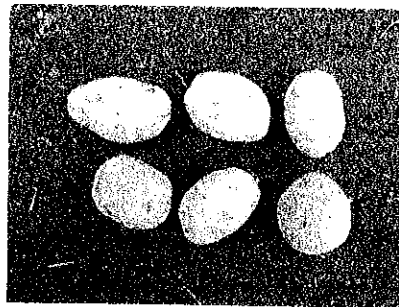
奥多摩町は、平成24年に在来種のジャガイモを商標登録しました。その名は、「治助イモ」。一般に山の畑育ちのジャガイモは美味しいといわれますが、この治助イモは格別です。

ジャガイモの故郷は、南米のペルー。3000mを超えるアンデスの山岳地帯から奥多摩の峰谷までどんな道をたどってやって来たかロマンを感じます。

サツマイモ(薩摩芋)は、どこへ行ってもサツマイモですが、ジャガイモの在来種には、いろいろな呼び名があります。当町だけでも治助以外に「ツリイモ」「ツルイモ」「セエダ」「セエダンボウ」などと呼ばれます。周辺では、桧原村で「オイネイモ」、小菅村「フシダネ」、丹波山村「オチアイイモ」「ツヤイモ」、上野原市西原「セイダイモ」とユニークな名前が付けられ、その由来もそれぞれです。そのなかでも、江戸時代にジャガイモを救荒食物として栽培を奨励した甲府の代官・中井清太夫由来の呼び名は広い地域で聞かれます。

ところで、峰谷の奥で連綿と栽培されてきた在来

種のジャガイモを育て守って来た方たちは、今、80歳を超えています。この貴重な山のジャガイモを多くの方々に味わっていただくこと、行政が率先して立ち上がりました。しかし、残念ながら種芋となる治助イモの絶対数が少なく、2年後3年後に期待するしかありません。



丹波山村には3年ほど前から在来種保存会があり、小菅村ではNPO法人が住民と協力して保存と栽培面積の拡大を計っています。遅れ

ばせながら、我が町奥多摩でも地域ブランド・治助イモが地域興し、町興しの核となることを期待します。

ちなみに、ジャガイモの植付け時期は、春3月。「冬来たりなば、春遠からじ」です。

(岡崎 学)

ガイドだより

鹿村の記録『倉沢四軒』

倉沢四軒は、1300年(南北朝)頃、秩父方面から移住して来たといわれます。仙元峠～一杯水～天目山を経て、ヨコスズ尾根を下って倉沢見通し尾根をたどって現在の地に入ったと考えられます。昭和10年代に「奥多摩工業(注)」がこの地に会社の宿舍等の建設が始まり倉沢三軒(坂和家は除く)は、600年間守り続けた耕作地を提供して、会社から「賃賃料」を得て働かなくてもお金を手に入れました。「奥多摩工業」はここに宿舍・床屋・映画館・浴場・食堂・診療所・消防所等を建設し、文化村を造りました。物資輸送の為、対岸の「山の神」からトボウ岩を経て千年檜の上まで、ロープウェイを設置しインフラも整備。

昭和42年頃に奥多摩工業は日原集落に転出し、倉沢三軒にはコンクリートの敷石のみ残り、耕作地には復元できず、この倉沢から姿を消しました。

平成19年山火事・付け火等の心配が懸念され、建物等はすべて撤去されました。今は、土台の敷石(コンクリート)だけが残るのみとなっています。

一軒残った坂和連(むらじ)氏は、一時期山を離れて下で生活していましたが、定年を過ぎ、この倉沢に戻って住み続けて、平成17年に97歳で他界しました。しばらくの間、坂和氏の耕作地と建物はそのまま残っておりましたが、私が再度平成23年2月に訪れた時には、既に建物は全て解体され、敷地の片隅に廃材が山積みになり、台所と思わしい処では水道の栓から清水が溢れでており、風呂場跡には壁の化粧タイルが当時のまま残されておりました。

当時、坂和氏が聴いていたのか、昭和10年代のレコード盤も多数放置されており、坂和氏が好んだ「天然」に遺っていく現象が進んでいました。その後の奥多摩工業社宅は、昭和33年7月に鉄筋コンクリート造りよりなる家族アパート1棟他完成。当時青梅市を含めて西多摩郡に初めて鉄筋アパートが建てられたわけで、日原の山中に自然と融和してその容姿を示し人々の目を驚かせました。

なお、文中にある「天然」と「自然」との使い分けで、日原の人の中にはこだわりがあり、「天然」とはそのままの自然で、「自然」とは、半分、手を入れた自然のことを指すようです。

(吉羽秀夫)

(注)

昭和12年創立時の名称は、「奥多摩電気鉄道(株)」でした。

施設案内

「どんぐりんこのテラス」

多摩川を間近に望む「どんぐりんこのテラス」では、大きなパンに特製シチュー(ビーフ・カレー・チャウダー)を入れた「どんぐりんこパン」や産地直送の新鮮な魚の刺身等、「驚き」をテーマにした、ちょっと変わった料理をお楽しみいただけます。やすらぎと憩いのひとときを、ぜひご体感下さい。

電話 0428-74-9515

住所 西多摩郡 奥多摩町 川井 54-1

営業時間 10:30 ~ 16:30 (ラストオーダー15:30)

定休日 毎週月曜日(祝日の場合は翌日、ただし、冬季は不定休)

イベント案内

奥多摩町と観光協会では、冬から春に向けてイベントを用意しております。「名人・達人観光ガイドの会」のガイドがご案内します。

希望者は、往復はがきに参加したいイベント名・住所・氏名・年齢・電話番号(2名様まで)を明記の上、奥多摩観光協会へ。(抽選の場合あり)

- ① 2月21日(木) 山里歩きシリーズ⑦
応募締切日 1月31日(ハイキング)
- ② 3月7日(木) 山里歩きシリーズ⑧
応募締切日 2月14日(ハイキング)
- ③ 3月12日(火) 山里に野鳥を訪ねる
応募締切日 2月19日(ハイキング)
- ④ 3月14日(木) 山里歩きシリーズ⑨
応募締切日 2月21日(ハイキング)
- ⑤ 3月21日(木) 山里歩きシリーズ⑩
応募締切日 2月28日(ハイキング)

募集人員：各回30名 参加費：700円

次号発行予定：平成25年4月15日

発行：奥多摩観光協会

住所 〒198-0212 奥多摩町 氷川 210

電話 0428-83-2152 Fax 0428-83-2789